

小林幸夫先生を偲んで

小林幸夫先生を偲んで

高野 春 廣

小林幸夫先生が亡くなった。

「沖野皓一さんを偲ぶ会」の準備の最中に知らせがあった。東海学園大学文学部の先輩、後輩の相次ぐ訃報に茫然自失の態であった。

小林先生とは、二人でよく飲んだ。玄関脇の事務局の前で待ち合わせ、校門までの短い時間に、「今日はどちら？右、左？」と会話し、右と言えば、地下鉄原駅近くの焼鳥屋、左と言えば、消防署を通り越して坂を少し上ったところの寿司屋。いずれもカウンター席の片隅で杯を酌み交わしたのだった。

「ビール1杯に、酒2合まで」「仕事（職場）の話はしない」というのが、二人の決め事であった。「酒飲みの小林」を知る人にはホントかなと思われるかも知れないが、京都に家を建て「単身赴任状態」になってからの小林さんは結構自制していらしたようだ。

「辞めることは良いことだ」と言い、組合の委員長も大学評議員も人文学部長もそして図書館長も一期か二期で自ら辞めてしまわれた。いずれの時も、私が副委員長であり、学部の評議員2人のうちの1人であり、副学長であったりして任期が重なっていたので、妙にさわやかに感じていた。

競馬に例えるのは不謹慎かもしれないが、昨年・二〇一七年の最終レース有馬記念を優勝、通算二十戦十二勝、史上最高の獲得賞金を得て、「絶頂期」なのに引退を表明したキタサンブラック。馬主の北島

三郎さんの「終わりと同時に始まりだ」という言葉と、「辞めることは良いことだ」という小林先生の言葉が重なって聞こえる。

小林先生から頂いた著書の一つに「しげる言の葉」という絶妙なタイトルをお付けになったものがある。俳諧から説話までを俯瞰しながら、そこを連ねる「遊び心」・「韻律」・「咄」・「雑談」に関心を寄せたものだ。

この論考の中で、「俳諧の座」や「茶の湯」は、「咄の場」であり「雑談の場」であったとして論を進めていられる。

生きた言葉が行き交う「咄」や「雑談」を重視する小林先生の姿勢に、共感するところ大であった。

大学の「共通科目」で、ともに「日本語表現法」を担当した時期もあり、「対話、雑談などの言葉のやり取りこそが、話者お互いの思考を深め、創造性を豊かにするのだ」などと、語りあったことを懐かしく思い出す。

実は、「咄の場」「雑談の場」、今流に言えば「パブリックアクセス」「コミュニケーションの広場」「発表・交流の場」などをつくり、維持することが私のライフワークである。

このうち、実行できているのが三つ。一つは、「春・朗読の一日」。

二つは、「お茶の間ゼミナール」。三つは、「東海・音声表現研究会」である。

①「春・朗読の一日」は、朗読交流会とでもいうべきイベント。筆者の地元岐阜県美濃加茂市の「文化の森」で毎年開き、今年（二〇一八年）で、第十八回となる。

朗読、読み聞かせ、語り、ストーリーテリングなど声で表現することと興味を持つ人々が、東海地方各地から集まり、声を出し合い、聴き合うというもの。

提案当初私の頭をよぎったのは、昔の盆踊りである。参加者皆が輪になって踊る。音頭取り（歌い手）は順に交代する。ただ見ているという人もいるが、多くは踊りかつ歌う。

コンクールでもないし、華々しい発表会でもない。好きな者が集まって、朗読三昧の一日を楽しもう、交流を深めようという趣旨での軽い気持ちからの提案であったが、予想を上回るたくさんの方の賛同者が集まり、賑わった。

二〇一一年四月二十九日・第一回の出演者は九十四人。プログラムエントリー三十二。観覧者は約三百人であった。昨年（二〇一七年）は、出演者百五十二人、プログラムエントリー四十五に増えている。

舞台で声を出すのは、一人当たり三分以内（当初は五分以内）と短いのだが、この日を迎えるまでの準備・練習は相当なもので、この過程・プロセスが貴重だ。そして、実際にステージに立つ。聞き手と直接に触れ合う。様々な朗読を沢山聴く。情報交換の場にもなる。

会場の中だけにとどまらず、その後、お互いの発表会を訪れあったり、合同の発表会を開いたりと交流の場は広がっている。

今年二〇一八年の「第十八回春・朗読の一日」は、四月二十二日（日）に開かれる。

②「お茶の間ゼミナール」も筆者の地元美濃加茂市で定期的に開いている。（当初5年間は毎月、現在は隔月）

小林幸夫先生を偲んで

喫茶店で、お茶（コーヒーか紅茶）を飲みながら、「話題を持った人」を招き、話をしていた後、質問、感想・意見を述べあう「ゼミナール形式」の誰でも参加できる、市民の自主的な会。会費はその都度払う。一回につき、千円である。

どんな雰囲気か。

毎日新聞の記事「（二〇〇五年五月二二日朝刊・「ぎふ漫遊」岐阜支局長・山本悟）がうまく描写してくれているので、抜粋して引用する。

「スーツ姿のサラリーマンにジャケットで決めた、おしゃれなおじさん。年配の女性の声が、白い内壁の店内に響く。・・・自由に意見を言い合うが、決して相手の主張を遮らない。暗黙のルールを守りながら、時には真摯に、また、生き生きとした表情で話す参加者の姿が印象的だった。・・・1時間の講演後、参加者の中から質問や意見が相次ぎ、終了後も何人かが、講師を囲んだ。・・・盛況な理由について、高野学長は『参加して来る人は、日常生活に追われる中で、お茶でも飲みながら、ちょっとだけ刺激を受けて、リフレッシュしたい、と思うのではないか』と話した。・・・町中の小さな講演会。地域文化の渦の目を、垣間見た気分になった。」

現在は会場を「中山道会館」に移し、会館を運営しているNPO法人の協賛を得て、奇数月に開催している。雰囲気は、先の毎日新聞の記事当時と基本的に変わっていない。

内容は、講演が多いが、落語、講談、演奏、歌なども織り交ぜ、硬軟さまざま。講師・出演者は東海地方にお住まいの方を主にしているが、チャンスをつかんで東京からお出でいただくこともある。

今年・二〇一八年三月で、例会は百十七回となった。

③東海・音声表現研究会については、当時本学日本文化学会の代表をなさっていた、小林先生の勧めもあって、本誌第七号（二〇〇七年）に「『音声表現』ゆたかな朗読を求めて」と東海・音声表現研究会

小林幸夫先生を偲んで

と題して、書いた。

『音声表現くゆたかな朗読を求めて』は、東海・音声表現研究会の機関誌で、A5約一〇〇ページ、十数本の論文・雑文とCD（朗読）で構成。一冊千円。二〇〇七年から二〇一一年まで、年二回、第十号まで発行した。

本誌第七号から引用すると、内容は、「科学的朗読法」、「共通語の発音・アクセント考」、「音声表現の基本・プロミネンス」、「ぜんぜん」から考えた、「日本語で使われるモンゴル語」などの論文論考、「女優・田中幸子さんに聞く」、「俳優・藤城先生に聞く」などプロの朗読家へのインタビュー、「絵本に会えてよかった」、「音訳に携わって」、「赤ちゃんから読み聞かせをはじめましょう」、「私の音声表現への取り組み」、「私の朗読『無茶 修行』などの体験談、「かっぱかっぱ」だったかい」、「たのしい朗読」、「鈴鹿麦わら帽子の会」など朗読サークルの紹介、「朗読本を観る」という書評シリーズ、等々硬軟取り混ぜた雑誌風のものとなっています。CD付きというのが最大の特徴です。「音声表現」なのだから声も届けなければ、ということで毎号「プロの朗読」と「声のテキスト」をCDに収録し、冊子に添付しています。CDだけでも千円の値打ち」は十分あるということも実売数をのばしている要因のようです。（創刊号千五百冊、第二号十号千冊）。この機関誌は、切りのいい第十号を終刊号とした。基本的には編集者の老齢化に伴うものであったが、小林流あるいはキタサンブラック流に「勢いのあるうち」に「辞めることはいいことだ」といった気分でもあった。

二〇〇〇年秋に発足した東海・音声表現研究会は、今なお続いている。俳優の舟木淳さんと私が共同代表。俳優、アナウンサー、研究者、教師、主婦、学生ら朗読・アナウンス・読み聞かせ・語り・講談など「音声表現」に興味を持っている人たちが、定期的に例会（月一回または二か月に一回）をもち、順に報告者（話題提供者）となり、話し

合いをしている。

二〇〇七年末までの例会のテーマは、本誌第七号に掲載したので、その後のテーマを付記する。

- 81、「子供の音読」
- 82、「榎木さんを偲ぶ」
- 83、「図書館は本を読むだけのところではない」
- 84、「パワフルな台湾メディア」
- 85、「ゼロからの出発」
- 86、「石川恵深の世界①」
- 87、「石川恵深の世界②」
- 88、「科学的朗読法（舟木淳）をめぐって」
- 89、「科学的朗読法のCDを聴く1」&新年会
- 90、「科学的朗読法のCDを聴く2」
- 91、「詩の朗読」
- 92、「幼稚園での読み聞かせ体験」
- 93、「中国語と日本語」
- 94、「朗読の理論」『朗読をあなたに』
- 95、「読み聞かせのプログラム」
- 96、「『音声表現・第6号』のCDを聞きながら」
- 97、「語り、かたり」
- 98、「舞台朗読」
- 99、「音楽と朗読のコラボ」
- 100、「私の司会メモ」
- 101、「朗読者の挑戦①」
- 102、「朗読者の挑戦②」
- 103、「講談は楽しい①」
- 104、「朗読のせりふと演劇のセリフ」
- 105、「ロシアの朗読」

- 107、「ゆきおんな」
- 108、「講談は楽しい②」
- 109、「授業で使える朗読講座」
- 110、「修善寺物語に出演して」
- 111、「読んで学べる田村躁の朗読教室」
- 112、「語りは音楽」
- 113、「インタビューの極意」
- 114、「朗読CD・岡本一平」
- 115、「語感雑感」
- 116、「名古屋甚句」
- 117、「心をひらく言葉の力」
- 118、「歌のチカラ、言葉の力」
- 119、「春・朗読の一日」
- 120、「音訳」
- 121、「新美南吉の文学と生涯」
- 122、「新美南吉を朗読する」
- 123、「朗読論」
- 124、「口演（語りと講談）」
- 125、「合唱と朗読①紫金草」
- 126、「合唱と朗読②聴き比べ」
- 127、「歌と言葉と発声と」
- 128、「私の朗読教授法」
- 129、「科学的朗読法・総括編」
- 130、「暗唱」
- 131、「みんなで群読」
- 132、「南吉童話の語りと朗読」
- 133、「講談は楽しい④『稲葉小僧』」
- 134、「発声法」

小林幸夫先生を偲んで

- 135、「坪内逍遙と朗読」
- 136、「語りと朗読は違うか」
- 137、「シェイクスピアと尾崎紅葉」
- 138、「話し言葉の特性を探る」
- 139、「伝える力を育てる」
- 140、「高校『国語表現』」
- 141、「小学校の音読事情」
- 142、「声は平和と交流を紡ぐ」
- 143、「ヴォイストレーニング」
- 144、「朗読とは」
- 145、「デジタル・ストーリーテリングと口語表現」
- 146、「講談は楽しい⑤『三方ヶ原の戦い』」
- 147、「『NHKアクセント新辞典』」
- 148、「ドラマリーディング上演の現場から」
- 149、「展覧会音声ガイド聴き比べ」
- 150、「初めての歌舞伎出演」
- 151、「『はだしのゲン』中国語翻訳」
- 152、「朗読漫画『花もて語れ』」
- 153、「東百道氏の朗読DVDと理論」
- 154、「東百道・渡辺知明朗読論争」
- 155、「日本語が壊れる」
- 156、「講談は楽しい⑥『男の友情』」

次回・一五七回の例会は、小林先生の一周年に近い二〇一八年四月である。

小林幸夫先生のご冥福を祈りしつつ、この稿を終える。